

## 『川崎 富作 先生』



6月の初め、日本全国の小児科医に激震が走りました。

川崎 富作先生がお亡くなりになったのです。

一般の人や他科の先生にはあまり馴染みはないでしょうが、小児科医にとって川崎先生は、伝説の人で、医学史に残る小児科医なのです。

バセドウ病、アルツハイマー病やパーキンソン病など、発見者の名前がついた病気は少なくないですが、日本人の名前のついた病気は、甲状腺の橋本病と小児の川崎病ぐらいしか思い浮かびません。

私が小児科に入局した時期に、ちょうど川崎病の大流行がありました。

初めは、川崎市の病気と勘違いしたことを思い出します。いまだに、原因は不明です。

その病態は全身の血管炎で、特に乳幼児期に罹患すると心臓の血管が炎症で腫れ、おとなの心筋梗塞のような症状を起こすことがあります。

早期に診断を付けて、早期に治療することが求められる怖い病気です。

すべての始まりは、日赤中央病院に勤務して11年目、昭和36年1月の夜でした。

入院した4歳の男児の症状は、猩紅熱(溶連菌感染症)に似ていたが、いくつかの点で矛盾がありました。やがて回復した男の子のカルテには「診断不明」と書くしかなかったのです。

翌年2月の当直の夜、急患で来た2歳の男児の症状がまったく同じでした。

川崎先生は、従来の医学書に書かれていない、未知の病気の存在を確信します。

もともとそれからの道のりは長く、険しかったのです。

新しい病気として学会で報告しても、反応はありません。

その後患者が増え続けても、学会のボスは認めようとしなかったのです。

1974年(昭和49年)にようやく国際学会での発表がかないました。

世界保健機関(WHO)から「川崎病」が公認されるのは、その4年後でした。

病気の原因は現在も不明で、新型コロナウイルスに感染した子どもが川崎病に似た症状を示しているとの報告が欧米で相次いでいます。

あらためて病気が注目されるなかで訃報が届きました。95歳でした。

東京・浅草に7人兄弟の末っ子として生まれています。「せめて一人は医者になってほしい」との母の願いを叶えました。

なぜ小児科を選んだのか、との質問に「僕自身が子供っぽいんじゃないのかな」と答えています。

けん玉が趣味で、海外の研究者たちにも、腕前を披露していたそうです。